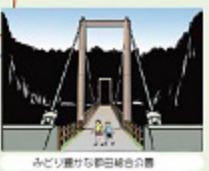


「谷上の六地藏」
 寛政9年(1652)藤家市川家の先祖が建てたもので長寿寺に祀られていた。川北地区が繁華安全なのは「六地藏様がお守りくださるおかげ」と思われていた。明治6年(1873)長寿寺が火災し、長寿寺となりの六地藏を市川家に引き取られた。その後、川北地区に新しい町名(赤坂)がはやり回った村人はお堂を再建して六地藏様をお祀りして安置した。すると不思議な朝霧も止まって平穏な暮らしに戻り、村人は六地藏を心をこめてお守りしている。

「滝沢瀧乳洞」
 昔、滝沢村の山奥に大蛇が棲みつ、作物を荒らし、家畜を襲っていた。村人は禊祓の中で修行する「役行者」に助けを求めた。行者は毎日知らず知らず大蛇を縛り絞めるお経を一心不乱に唱え、行者の祈りが通じて大蛇が弱れなくなり、村人は安心して暮らせるようになった。

「でんでんころ(滝沢町)」
 山を切り開き畑をでき、暮になると、やわらかい湯が湧き出る子とての湯の湯が湯で、ココロころろとって遊んだので「でんでんころ」と言われた。

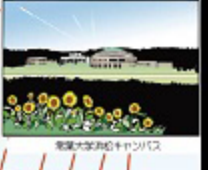
「牛川湯(滝沢町)」
 井戸を掘く時に岩山の石を牛で運んだため、名づけられた。この湯の一角が湯の湯といふ所に残っている。お湯の多い湯でも牛も大変だった。



「遷都の候補地-ここが都だ」
 今から1000年前、桓武帝が都を奈良から「新しい地」に移す時、郡田の地を喜び「ここが都(みやこ)だ」と言われたことが「みやこ」の地名の由来と伝えられている。小規模ではあるが郡田は京都によく似た地形で、郡田川は鴨川と同じ流れ方をしている。郡田は古くから「九重の里」と言われていたが、「九重の里」は皇都に出仕する貴人が居住する堂の意味で、平安京に由来する呼称ではないだろうか。

「根洗の松」
 500年余の歴史。一人の老翁が水がなく枯れそうなる松の根もとにたたくずんずん、おたたくうちに松を枯らした。おたたくうちに松の根もとが湧き出し、その水で根を洗ったおたたく松が生き返った。松の色が鮮やかに輝きだした。おたたく松、そのおたたく松が弘法大師といふゆえ、この土地を「清水」、松を「根洗の松」と呼ぶようになった。

「狐にだまされた話」
 真田に入植して暮らさない、向道をして、赤松の無名の所に暮らした。月も無い雨の夜、狐の影を見た。狐は、狐の影で家に来ると、母の影を写すように、狐の影を見た。狐の影は、狐の影を写すように、狐の影を見た。狐の影は、狐の影を写すように、狐の影を見た。



「新田信立(三方原)」
 新田信立は、新田信立を目的していたと思いきや、新田信立を意図して「新田信立」(大田原)「大田原」をとり、三方原に入ったといわれる。